

原 弘二郎先生を偲ぶ

富 沢 靈 岸

本学名誉教授、原弘二郎先生が昭和五四年七月三〇日に逝去された。五一年二月に倒れられてその後茨木の第二警察病院に入院静養されていたが、その後症状も落着き、五二年秋からは退院されて自宅で静養されていた。われわれはひたすら先生の御健康の回復を祈っていたが、ついに不帰の客となられた。もはや先生の温顔に接することが出来なくなったとは、誠に悲しい。謹んで先生の御冥福をお祈り申上げる次第である。

先生の戒名は清蓮院英学日弘居士。菩提をとむらわれた吹田市江坂の法華寺御住職は関西大学史学科の御卒業と伺ったが、奇しき因縁といわねばならない。

目は人をあらわすというが、先生の目は誠にうるわしい目であった。正に先生はその通り温厚篤実な先生であった。しかし長い間先生と接することが出来た筆者には、先生のきびしさも感ずることが出来た。先生は曲ったことが大嫌いな先生であり、その点は無愛想なほど潔癖な先生であった。正しきを正しいとし、悪しきを悪しとすることは、いうは易く行なうことの難しいことである。それを地でゆかれた先生からは、筆者は貴重な教訓と無言の叱咤をうけた思いがする。ある先生から、「原君がいいと思ったらいい。悪いと思ったら悪いよ」といわれたことがあった。これほどよく原先生をとらえた言葉はない。しかし考えてみれば、実はそれは極く当り前のことである。ところがわれわれは、その当り前のことが出来なくて困るのである。

初めて筆者が先生にお会いしたのは昭和二六年八月一六日と記憶するが、筆者が島根大学助手として松江に赴任するべく先生をお訪ねした時であった。先生は病気を克服されて元氣になられた直後で、夏で裸に近い恰好をしておられた先生の布袋腹が今も強く印象に残っている。原先生とはそのように小肥りの先生であるといったら、瘦身の昔の先生を知っておられる先輩方から笑われた。しかし松江において筆者がお近付きをえた原先生とはそういう先生であったのである。

先生の島根大学教授時代は、島根大学の発足当初で誠に忙しい時期であった。先生は、学部長の補佐役である評議員として忙しく立ち回られた。人間は会議をする動物らしい、というセリフを残してアタフタとあいつぐ会議に精励された。筆者の原先生の印象はそういう元氣な、やや小肥りの原先生であり、昔日の瘦身の原先生ではないのである。

その後関西大学に着任されてからも、筆者はよく先生を訪ねて松江の話を紹介した。先生は筆者が松江の便りを携えて来るのを心待ちして下さっていた、と思うのは筆者の独り合点であったか。

先生は極めて適確に物事を見抜かれる先生であった。適確に物事を見抜き、ありのままをそのまま語られる先生の話は極めて面白いものであった。先生は話上手であったが、その秘密は、実はそんな所にあったのかも知れない。しかし、歴史とは実はそんなものを志向しているのではないだろうか。先生は歴史を語っておられたような気がしてならないのである。

昭和四八年、先生の関西大学御退職の後、先生の御推挙を得て関西大学に着任した筆者が、時折お訪ねしていた先生の研究室に納り返った時は、先生を追い出してしまったような気がして、何だか変な気がした。しかし、松江時代から見慣れた懐しい先生の本を沢山残して頂いて誠に有難い。とくに、今、筆者の研究室の机上にある、グルグルま

わるガッシリした本立は、旧制松江高等学校教授方の机の上におかれていた本立である。今は、松江時代のお元気な原先生を偲ぶ悲しいよすがとなってしまったが、大切に使用させて頂きたいと思っている。

もはや先生の面白いお話を伺うことが出来なくなった。たしか昭和五〇年の年末と記憶するが、先生のお宅にお邪魔させて頂きたいという電話をしたら、何時になく先生は、「君、もう来なくていいよ」といわれた。何時も「どうぞ、どうぞ」といって下さる先生の返事を期待していた筆者は、一瞬、おかしなことをいわれるなと思ったが、今、思い出してみると、先生はもうしんどくて疲れきっておられたのかも知れない。それから二た月経たぬ間に先生は倒れられた。何となく淋しく筆者の耳底に残っている言葉である。大学につとめ出してから三〇年近くお近付きさせて頂いた先生から、今ついに見放されてしまって誠に淋しい。人間はだんだんと一人とり残されてゆくものであらうか。原先生御得意の自作の句がある。

年々に刈残さるる案山子哉

ひたすら先生の御冥福を祈りつつ擲筆したい。